HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | Heritage Conservation Challenges on the Rock-Hewn Churches of Tigray, Ethiopia [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review] |
| Author(s) | Weldegiorgis, Ephrem Telele |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(工学) |
| Dissertation Number | 甲第13348号 |
| Issue Date | 2018-09-25 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/71825 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/ |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | Ephrem_Telele_Weldegiorgis_review.pdf, 審査の要旨 |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　博士 (工学)　氏名　Ephrem Telele Weldegiorgis

審査担当者　主　査　教　授　小澤 丈夫
副　査　教　授　瀬戸口 剛
副　査　教　授　森 傑
副　査　客員教授　三宅 理一　（東京理科大学理工学部）

学位論文題名

Heritage Conservation Challenges on the Rock-Hewn Churches of Tigray, Ethiopia
(エチオピア・ティグライ岩窟教会群における遺産保存活動)

近年、建築遺産の保存に関する議論は、単なる物理的な修復手法から、遺産のもつ様々な側面に対応しうる包括的なアプローチに移行しており、地域が何を必要としているかを理解した上で、伝統的なノウハウと技術をいかに継承するかに関心が寄せられている。今日の遺産保存活動において、有形・無形文化財に対する地域の役割と参加のあり方を明らかにすることは不可欠である。

本研究は、エチオピア・ティグライにある岩窟教会群の保存修復活動を前提となし、その活動のための方法論を構築すべく、エチオピアと日本の双方を視野に入れてフィールド調査と分析を行ったものである。調査の着眼点は以下の 5 点である。(1) 対象となる歴史的建築物の損傷項目を具体的に把握する、 (2) 損傷にともなう劣化の度合いをはかり、その保存修復活動がもたらす効果をはかる、(3) 異なる主体による保存修復活動が地域コミュニティに及ぼすインパクトの度合いをはかる、 (4) 歴史的建築物に内在する在来のノウハウと技術の位置づけを行い、公的機関による保存修復活動がそれをどの程度に反映させているかを把握する、 (5) 地域コミュニティから見た歴史的建築物の文化的・宗教的な価値を評価し、保存修復活動との間にとりもつべき関係を位置付ける。調査方法は、関係者とのグループディスカッション、主要人物への詳細な聞きとり、フィールドリサーチ、文献調査を主とする。また、宗教建築の保存における地域コミュニティの役割について知見を得るために、エチオピアの事例分析と併行して日本の文化財保存の枠組みを検討し、その制度的恩恵からは比較的外れている下北半島における仏教寺院の事例を調査している。

本研究は 7 章からなる。第 1 章では、調査研究の意義、目的、方法について述べている。第 2 章では、エチオピアの調査対象地と建築遺産の概要、ならびに関連するに既往研究について、文献調査により明らかにしている。第 3 章では、エチオピアの文化財保存に関する法体系と諸制度、その起源と発展過程を明らかにすると共に、国際機関によるこれまでの介入と保存活動の経緯を明らかにしている。第 4 章では、エチオピア・ティグライにおける岩窟教会群の保存事例に対する現地調査のデータを開示し、保存活動を主導する公的機関に対する地域コミュニティの反応、保存のための伝統的ノウハウと改修時の技術基準を分析している。第 5 章では、日本における文化財保護のシステムと法的枠組みに着目し、青森県むつ市にある 3 つの仏教寺院に対する現地調査の結果について述べている。ここでは、歴史的建造物保存のための、組織的取り組み、法的枠組み、諸制度の構築が、エチオピアにおける文化財保存に有効な知見となることを指摘している。第 6 章では、宗教建築の保存のために、サスティナブルな地域コミュニティによるマネジメントが必要であること

を述べている。第 7 章では、建築遺産の保存について将来にむけた改善の要点を示し結論としている。

本研究によって、劣悪な管理、雨水、保存活動における公的機関の不適切な介入が、岩窟教会群の状態悪化を招く原因になっていることが明らかにされている。藻類、地衣類、カビなどによる自然要因が状態の悪化を加速させ、地域コミュニティが、保存活動において裁量をもつ国や国際機関に対して阻害感を感じていることも状態悪化の要因であることが指摘されている。地域が維持してきた伝統的な修理の役割を無視した早急かつ不十分で不適切な介入が、教会群の保存をかえって困難にしていることが実証的に示され、近年、ツーリズムへの関心の高まりを受け、妥協的な保存活動に終止するのではなく、ツーリズムとの適切なバランスを見いだす必要性も説かれている。

エチオピアの岩窟教会やむつ市における寺院は、地域コミュニティの日常生活の一部をなすいわゆるリビングヘリテージであり、その保存において、関連する文化的・宗教的な資産価値と地域コミュニティをプロセスに取り入れる必要がある。ティグライの事例では、体系的な文化財保護のシステムを欠く中で、多くの場合、外国人専門家に主導される実施機関が地域の伝統技術に関心がないこと、地域コミュニティに意見を求める前にすでに結論を出していること、などが挙げられる。むつ市の事例では、檀家制による地域コミュニティの関与、宮大工による技術継承などが伝統的に認められる一方で、文化財制度が及ばない中で寺院の一方的な裁量による歴史的建造物の保存/取り壊しの決定、保存を担う新しい世代の人材減少などが問題として指摘されている。結論として、建築遺産の保存活動において、地域資産をサスティナブルなものとするために、地域の知識と技術を活用し、地域コミュニティを保存プロセスの中心に位置づけたアプローチを構築することの重要性を導きだしている。

これを要するに、本論文は、地域に根ざした建築遺産の保存手法の開発に向けての学術的・技術的な方策についての新しい知見を得るものであり、建築史意匠学、文化財保存修復学、地域計画学に対しての学術的貢献に資するところ大なるものがある。

よって著者は、北海道大学博士 (工学) の学位を授与される資格あるものと認める。